様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ４ 月 ２８ 日現在

機関番号：３４３０４
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０７６９

研究課題名（和文）早期英語教育の長期的な効果に関する量的・質的研究

研究課題名（英文）A Quantitative and Qualitative Research on the Long-Term Effectiveness of Early English Language Instruction

研究代表者
植松　茂男（UEMATSU, Shigeo）

京都産業大学・文化学部・教授

研究者番号：４０２８８９６５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,900,000円、（間接経費）　1,170,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は，小学校英語活動の長期的効果が中学時点で存在するのか量的･質的に調査した。最も履修開始が早い2012年度中学1年生（小1開始、計130時間履修）が，高いスコアを示すと期待されたが，2009年度中１生（小４開始、計90時間）にテストの全てのスコア（語彙文法、リーディング、リスニング、インタビュー）で及ばなかった。開始学年を早めても，この程度の履修時間数では中学校英語のスキル面に貢献するとは限らないことがわかった。情意アンケートは変化なく早期化の影響が見られなかった。中学生へのインタビューでは，小英を「楽しかった」と答えるものの，何をやったか「よく覚えていない」という回答が目立った。

研究成果の概要（英文）：The study was conducted by employing both quantitative and qualitative methods for several years at the same public junior high school to investigate on the long-term effectiveness of primary school English activities. The 2012 grade seven students, who received primary English instruction earliest from their grade one (in total 130hours), were expected to achieve highest test scores. However, they were outperformed by the 2009 grade 7 students, who started English from their grade four (in total 90 hours) in all aspects of the tests. This result suggests given lowering the starting grade of English instruction, it does not contribute the betterment of English skills of junior high school students because of the limited English class hours. As for the motivational scores, they did not change overtime. In a semi-structured interview, junior high students often referred to primary school English activities as fun, however they did not remember well what they did.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学、外国語教育

キーワード：早期英語教育　小学校英語活動　長期的効果　量的研究　質的研究

１．研究開始当初の背景

大阪府 A 市は, 2005 年度から 2007 年度まで 3 年間の「英語特区」指定期間にあわせて「国際コミュニケーション科」を市内全ての小中学校でスタートした。2005 年度は小学校 5，6 年で，週１回ずつ年間 35 時間，中学校で通常の英語授業（週 3 回）に加えて週１回ずつ年間 35 時間実施。2006 年度からは小学校 1 年生からの実施に踏み切った。実施時間数は低学年（１，2 年）で年間 10 時間，中学年（3，4 年）では年間 20 時間である。英語を通して「発信型コミュニケーション力」の育成を目指すことを「国際コミュニケーション科」の主なねらいとしている。これら早期から英語に触れた児童が中学校に入学してくるのが 2011 年度（小 2 から），2012 年度（小１から）である。A 市では開始学年の早期化だけでなく，「小中連携」の実施や，「ALT を活用した授業」が当初から行われている。また, 市の統一カリキュラムも存在し，経験豊富な日本人英語教員も ALT とともに配置され，均質化した指導が全市で行われた。

２．研究の目的

本研究は，毎年同一の語彙・文法，リーディング，リスニングからなる英語力指標テストとインタビューテストを併用して，英語力を毎年同じ中学の 1，2，3 年次修了時点で定点測定するとともに, 23 項目からなる情意アンケートや児童・生徒・教員インタビューも併せて実施し，小学校英語活動の情意面での検証も試みた。小学校英語活動の開始学年の早期化や履修時間の増加が，中学校で教科として始まる「英語」にどのような影響を及ぼすのかを，英語スキルだけでなく情意面からも中学 1 年生，2 年生，3 年生の各学年で毎年調べることによって探ろうとするものである。

３．研究の方法

（1）英語力指標テスト

本研究に於いては，前科研費研究（2007−2010 年)以来採用している ELPA 社の JACE (Junior High School Assessment of Basic English) テスト (Level 1：中１修了レベル，Level 2：中 2 修了レベル，Level 3：中 3 修了レベル）を利用した。このテストの内容は語彙・文法（22 問，100 点満点)，リーディング（10 問，100 点満点)，リスニング（18 問，100 点満点)，計 300 点満点を 45 分で解く問題である。ELPA 社によると，各テストの信頼性評価(reliability estimate)は，クロンバック α 値でそれぞれ，Level 1（中１）=.81，Level 2（中 2）=.81，Level 3（中 3）=.86 である。協力者数は毎年各学年 250 名程度，合計 700 名程度であった。

（2） インタビューテスト

JACE テストに含まれないスピーキング力を測るため，前研究の手法を引き継ぎ，簡単な英語の「会話」(conversation)テストと，手渡した絵をもとに自分でストーリーを実施した。英語で自由に語る「カンバセーション」(conversation)ならびに「ストーリー・テリング」(story-telling)テストの二部から構成されている。問題作成・評価基準作成にあたっては，英検 3 級の 2 次テストの問題・評価シートを参考にした。インタビューテスト実施は N 中学と相談，２年生から JACE テストで平均点に近いクラスを１クラス選んで実施することとした。人数は，毎年約 35 名であった。実施時間は２つあわせて 1 名約 7 分程度であった。

（3）情意アンケート・英語に関する質問

上述の前研究の調査と同じものを利用した。情意アンケートは，過去のアテイチュード（情意)，モチベーション（動機）研究の文献・アンケートを参考に作成した 60 項目を，パイロットテストで主成分分析し，23 項目にしたものを用いた。これはホームルーム等を使って短時間で実施できるようにという学校側からの要望に配慮したためである。さらに英語学習経験に関する質問（渡航歴，英会話教室の経験など）も 7 項目加え，合計で 30 項目となった。回答に要する時間は約 15 分である。情意アンケート項目については全て「1：全くそう思わない　2：そう思わない　3：どちらとも言えない　4：そう思う　5：強くそう思う」の 5 択式でマークシートに回答してもらった。協力者数は JACE テストとほぼ同数である。

（4）教師・生徒アンケートについて

本取り組みは，2011 年から 2013 年まで実施した。毎年，中学校 1 年生から 3 年生までの 10 名を学年，出身小学校，男女比が均一になるように配慮し，「小学校英語活動」についての振り返りを約 15 分ずつ聞き，それらをトランスクライブして文書化した。それらの文書を小中学校の先生方に読んでいただいた上で話を聞いたり，小学校英語教育についての感想を書いてもらったりした。

（5）実施時期・形態について

2011 年度から，N 中学校の 1 年生から 3 年生まで約 700 名を対象に，学年末同時期の 2013 年 3 月上旬まで実施した。内容は，各学年とも上記 JACE テスト，アンケートである。インタビューテストに関してのみ，上述のように毎年 2 年生から１クラスを選び学年末に実施した。また，インタビューは毎年 11 月に実施した。児童・生徒インタビューの時間は基本的に 20 分であった。先生に対しては時間の許す範囲でインタビューもしくは文書で回答を得た。

４．研究成果

(1)　JACE テストによる語彙・文法，リーディング，リスニングテスト結果の比較

JACE テストで得られたデータは, 統計準備処理(preliminary analysis)(Field，2009)を終えた上で一元配置分散分析(ANOVA)検定を行い，統計的有意差がある場合は

Bonferroni 多重検定により，過去の学年と比較を行った。表１は中学１年生の JACE テスト結果（語彙・文法，リーディング，リスニング，各項目 100 点満点，合計 300 点満点）の 2007 年度分から 2012 年度分までのスコアを比較した結果である。2010 年度は N 中学の都合で実施中止のためデータがない。それぞれの年度の小英活動の時間は，2007 年度 70 時間，2008 年度 70 時間，2009 年度 90 時間，2011 年度 120 時間，2012 年度 130 時間であった。

表１　中学１年生の JACE テスト結果

		N	*M*	*SD*	*SE*
vg	2007	209	56.5	13.7	.9
	2008	198	54.6	15.8	1.1
	2009	199	56.8	11.1	.7
	2011	223	53.3	13.7	.9
	2012	210	56.5	17.6	1.2
read	2007	209	55.9	19.0	1.3
	2008	198	58.8	21.1	1.5
	2009	199	60.9	14.3	1.0
	2011	223	57.8	17.4	1.1
	2012	210	59.1	23.4	1.6
listen	2007	209	58.7	10.8	.75
	2008	198	58.8	12.4	.88
	2009	199	60.2	20.2	1.4
	2011	223	54.5	10.8	.72
	2012	210	56.8	12.5	.86

注: vg = 語彙文法スコア，read = リーディングスコア，listen = リスニングスコア

一元配置分散分析(One-way ANOVA)結果は以下の通りである。語彙・文法テスト(vg) $F(4, 1034) = 2.26$, $p = .06$)，リーディングテスト(read) $F(4, 1034) = 1.87$, $p = .11$)，リスニングテスト(listen) $F(4, 1034) = 5.34$, $p = .00$）。多重比較も含めた分析の結果，

・語彙文法では統計的有意差無し。

・リーディングでは統計的有意差無し。

・リスニングで 2011 年に対して過去のそれぞれの学年が統計的有意に上回る。2007 年($p = .03$, $d = .30$)，2008 年($p = .02$, $d = .31$)，2009 年($p = .01$, $d = .40$)。

表２は中学 2 年生の JACE テスト結果（語彙・文法，リーディング，リスニング，各項目 100 点満点，合計 300 点満点）の 2007 年度分から 2012 年度分までの比較である。それぞれの年度の小英活動の時間は，2007 年度 35 時間，2008 年度 70 時間，2009 年度 70 時間，2011 年度 110 時間，2012 年度 120 時間であった。

表２　中学２年生の JACE テスト結果

		N	*M*	*SD*	*SE*
vg	2007	178	51.3	14.6	1.1
	2008	210	52.4	14.2	.9
	2009	204	51.2	15.1	1.0
	2011	245	53.8	14.5	.9
	2012	227	50.8	13.9	.9
read	2007	178	46.5	23.7	1.7
	2008	210	48.3	22.5	1.5
	2009	204	48.8	24.4	1.7
	2011	245	50.8	23.1	1.4
	2012	227	44.3	22.1	1.4
listen	2007	178	50.8	14.0	1.0
	2008	210	52.2	11.8	.8
	2009	204	51.0	12.6	.8
	2011	245	52.9	13.1	.8
	2012	227	48.2	10.4	.6

注: vg = 語彙文法スコア，read = リーディングスコア，listen = リスニングスコア

一元配置分散分析(One-way ANOVA)結果は以下の通りである。語彙・文法テスト(vg) $F(4, 1059) = 1.57$, $p = .18$)，リーディングテスト(read) $F(4, 1059) = 2.61$, $p = .03$)，リスニングテスト(listen) $F(4, 1059) = 4.70$, $p = .00$）。多重比較も含めた分析の結果，

・リーディングで 2011 年が 2012 年を統計的有意に上回る($p = .02$, $d = .39$)。

・リスニングで 2012 年に対して 2008 年，2011 年が統計的有意に上回る。2008 年($p = .02$, $d = .36$)，2011 年($p = .01$, $d = .40$)。

表３は中学３年生の JACE テスト結果（語彙・文法，リーディング，リスニング，各項目 100 点満点，合計 300 点満点）の 2007 年度分から 2011 年度分までの比較である。それぞれの年度の小英活動の時間は，2007 年度 12 時間，2008 年度 35 時間，2009 年度 70 時間，2011 年度 90 時間，2012 年度 110 時間であった。

表３　中学３年生の JACE テスト結果

		N	*M*	*SD*	*SE*
vg	2007	200	67.7	20.9	1.4
	2008	180	65.0	22.0	1.6
	2009	222	65.0	23.0	1.5
	2011	174	66.3	22.7	1.7
	2012	245	68.7	22.8	1.4
read	2007	200	71.6	25.3	1.7
	2008	180	69.3	21.0	1.5
	2009	222	67.9	24.6	1.6
	2011	174	71.0	23.6	1.7
	2012	245	66.1	26.6	1.7
listen	2007	200	71.1	14.5	1.0
	2008	180	70.4	16.0	1.1
	2009	222	71.5	15.7	1.0
	2011	174	71.7	16.4	1.2
	2012	245	72.8	16.6	1.0

注: vg = 語彙文法スコア，read = リーディングスコア，listen = リスニングスコア

一元配置分散分析(One-way ANOVA)結果は以下の通りである。語彙・文法テスト(vg) $F(4, 1016) = 1.18$, $p = .32$)，リーディングテスト(read) $F(4, 1016) = 1.84$, $p = .12$)，リスニングテスト(listen) $F(4, 1016) = .67$,

p = .64）。各年度間に統計的有意差はみられなかった。

(2) インタビューテストの結果の比較

表４は中学２年生で実施したインタビューテストの結果である。インタビュー前半の英語によるやり取り「会話」(conversation)，後半は絵を見せて英語で話をする「ストーリー・テリング」(story-telling)に分かれている。

表４　インタビューテスト（会話）の結果

		N	*M*	*SD*	*SE*
conv	2007	31	11.5	2.6	.4
	2008	35	13.5	1.6	.2
	2009	35	13.1	3.1	.5
	2011	35	12.3	2.0	.3
	2012	33	11.5	2.1	.3
stytl	2007	31	7.5	3.1	.5
	2008	35	11.3	3.0	.5
	2009	35	11.9	3.1	.5
	2011	35	11.2	2.1	.3
	2012	33	10.9	2.7	.4

注: conv = 会話スコア，stytl = ストーリーテリングスコア

一元配置分散分析(One-way ANOVA)結果は以下の通りである。会話テスト(conv) $F(4, 164) = 5.06$, $p = .00$)。結果が統計的に有意であったが母集団が少ないため Turkey 法による多重比較を行った。分析の結果，2008 年が 2007 年を($p = .01$)，2012 年を($p = .01$)統計的有意に上回り，2009 年が 2012 年を($p = .05$)統計的有意に上回った。

一方，「ストーリー・テリング」の一元配置分散分析(One-way ANOVA)結果は以下の通りである。ストーリー・テリングテスト(stytl) $F(4, 164) = 11.89$, $p = .00$)。同じく Turkey 法による多重比較分析の結果，2008，2009，2011，2012 年度が 2007 年を統計的有意($p = .00$)に上回った。

(3) 情意アンケート結果の比較

本研究では，アンケート結果（５択式）を「ラッシュ分析法」(Linacre，2008) を使い標準化（数値化）した。その上で「質問項目信頼性」(item reliability)，及び「回答者信頼性」(student reliability)，「天井効果」(ceiling effect) などをチェックしながら統計処理を行った。こうした心理統計学的(psychometric)な手法を用いた点ではこれまでにない取り組みである。

中学 1 年生の情意アンケート結果の 2007 年度分から 2012 年度分までのスコアを比較した。2010 年度は上述の理由でデータがない。

一元配置分散分析(One-way ANOVA)結果は以下の通りである。F1 $F(4, 1033) = .36$, $p = .89$)，F2 $F(4, 1033) = 2.53$, $p = .04$)，F3 $F(4, 1033) = .41$, $p = .80$)，F4 $F(4, 1033) = .20$, $p = .94$)，F5 $F(4, 1033) = .11$, $p = .98$)。F2 の結果が統計的に有意であったため，多重比較を行ったが，各年度間に統計的有意差は検出されなかった。

中学 2 年生の情意アンケートの 2007 年度分から 2012 年度分までの比較，各年度間に統計的有意差はみられなかった。

中学３年生の情意アンケートの 2007 年度分から 2012 年度分までの比較，各年度間に統計的有意差はみられなかった。

(4) 性差，学校別，学校外英語学習の開始学年・頻度と JACE テストスコアの関係

また，2011 年度調査結果報告で次年度以降の課題となっていた，塾等での英語学習の経験やその他考えられる要因についても 2012 年度中学１年生を対象に，テストスコアへの影響を調べてみた。その結果，興味深い事実が判明した。これらは JACE テストスコアと「性別」，「出身小学校」，「学校外の英語学習」についての質問項目による比較である。表５は性別による点数比較である。M は男子を，F は女子を表す。Levene の等分散性検定の確認及び，多重検定結果は Bonferroni 調整を実施している。

表５　JACEテスト結果の性別による比較

	性別	*N*	*M*	*SD*	*SE*
VG	M	104	55.7	17.1	1.6
	F	106	57.2	18.2	1.7
Read	M	104	57.6	24.6	2.4
	F	106	60.6	22.2	2.1
Listen	M	104	54.8	13.0	1.2
	F	106	58.7	11.8	1.1

注: vg = 語彙文法スコア，read = リーディングスコア，listen = リスニングスコア

分析の結果，性別でテスト結果を比較すると，語彙・文法テスト(vg)（$t = -.64$, $df = 208$, $p = .52$)，リーディングテスト(read)（$t = -.94$, $df = 208$, $p = .35$)，リスニングテスト(listen)（$t = -2.27$, $df = 208$, $p = .03$）となり，リスニングで統計的優位に女子の点数が高いことが判明した。

次にこの中学校区にある二つの小学校別の比較である（表６）。A 小学校と B 小学校という仮名にしてある。等分散性検定と多重検定は同じ。

表６　JACEテスト結果の学校別比較

学校名		*N*	*M*	*SD*	*SE*
VG	A	135	58.4	18.0	1.5
	B	64	52.3	17.2	2.1
Read	A	135	60.2	23.6	2.0
	B	64	56.3	22.4	2.8
Listen	A	135	57.6	13.0	1.1
	B	64	55.0	12.3	1.5

注: A,B 二小学校を指す。vg = 語彙文法スコア，read = リーディングスコア，listen = リスニングスコア

分析の結果，語彙・文法テスト(vg)（$t = 2.27$, $df = 197$, $p = .03$)，リーディングテスト(read)（$t = 1.11$, $df = 197$, $p = .27$),

リスニングテスト(listen) (t = 1.32, df = 197, p =.19)となり，語彙・文法テスト(vg)でＡ校がＢ校を統計的有意に上回った。

表７は，「学校外における英語学習の経験の有無」と「あり」の場合の開始学年別のテスト比較結果である。多重比較検定にはTukey 法を使い，さらに各グループの人数が異なるため，統計処理上 harmonic mean sample size (30.773)を用いた。

表７　JACEテスト結果の「学校外英語学習の開始学年」による比較

	開始学年	*N*	*M*	*SD*	*SE*
VG	なし	82	48.0	15.7	1.7
	小６	37	60.4	14.5	2.3
	小５	30	60.7	15.8	2.8
	小４	15	63.5	16.2	4.1
	小3以前	43	64.1	19.2	2.9
Read	なし	82	50.6	21.0	2.3
	小６	37	63.0	19.6	3.2
	小５	30	62.2	25.8	4.7
	小４	15	66.3	21.2	5.4
	小3以前	43	68.5	24.9	3.8
Listen	なし	82	51.3	11.7	1.2
	小６	37	59.4	10.5	1.7
	小５	30	58.1	12.7	2.3
	小４	15	62.7	13.7	3.5
	小3以前	43	62.4	11.2	1.7

注: vg = 語彙文法スコア, read = リーディングスコア, listen = リスニングスコア

分析の結果は以下の通りであった。語彙・文法テスト(vg) $F(4, 202) = 9.53$, $p = .00$), リーディングテスト(read) $F(4, 202) = 5.64$, $p = .00$), リスニングテスト(listen) $F(4, 202) = 8.52$, $p = .00$) 。多重比較結果で統計的有意差が頻出した。

表８は，「学校外における英語学習の経験の有無」と「あり」の場合の週あたりの頻度別のテスト比較結果である。多重比較等は同じ。

表８　JACEテスト結果の「学校外英語学習の頻度」による比較

	頻度	*N*	*M*	*SD*	*SE*
VG	なし	80	48.5	15.9	1.7
	週1	72	59.2	16.5	1.9
	週2	48	65.5	17.7	2.5
	週3	7	57.0	13.2	5.0
	以上	3	56.3	13.3	7.6
Read	なし	80	50.3	21.0	2.3
	週1	72	63.3	22.4	2.6
	週2	48	69.0	21.9	3.1
	週3	7	60.8	19.5	7.3
	以上	3	33.3	48.5	28.0
Listen	なし	80	50.3	21.0	2.3
	週1	72	63.3	22.4	2.6
	週2	48	69.0	21.9	3.1
	週3	7	60.8	19.5	7.3
	以上	3	33.3	48.5	28.0

注: vg = 語彙文法スコア, read = リーディングスコア, listen = リスニングスコア

分析の結果は以下の通りとなった。語彙・文法テスト(vg) $F(4, 205) = 8.78$, $p = .00$), リーディングテスト(read) $F(4, 205) = 7.23$, $p = .00$), リスニングテスト(listen) $F(4, 205) = 7.71$, $p = .00$) 。多重比較結果では，統計的有意差が「経験なし」と「週１回」,「週２回」の間で検出された。

(5) 考察とまとめ

本研究結果では，寝屋川市の小学校英語(国際コミュニケーション)活動開始学年が2007 年度の小学校 5 年生から 2012 年度には１年生に早まり，よって総履修時間数も 60 時間増えたが，残念ながら，それが中学生の英語テストの点数の向上に反映されたと量的に検証はできなかった。調査計参加者数が3500 名であることを考えると，もし英語活動開始学年の早期化・総履修時間数の増加が，英語スキルの向上に効果があるのであれば，中学校の英語テストの年次比較に統計的有意差として出てもおかしくないはずである。また，情意面に於ける年次ごとの変化は１年生のごく一部を除いて検出できなかった。英語力同様，この程度の履修時間数では生徒の情意回答を変えることはなかった。これらを踏まえて結果を以下のようにまとめたい。

① 小学校英語活動開始学年の早期化とそれによる総履修時間の増加は，必ずしも中学校1 年, 2 年, 3 年次における英語の語彙･文法，リーディング，リスニング，インタビューのスコア向上につながらなかった。総履修時間数(最大 130 時間)が少なすぎるのが一番の理由と考えられる。

② 情意アンケートでは，毎年ほぼ同一の結果が出た。アンケートをとる日時(ほぼ同時期のホームルーム時)，取り方(マニュアル利用), 参加者数の確保(毎年 700 名), 対象校(同一), データ処理(preliminary analysis 含む)を丁寧に行う，などの条件が揃うと，同一校で同一アンケートを繰り返すと極端な年次差は出にくいと考えられる。

③ 中学 1 年修了時点では，語彙・文法，リーディング，リスニングの全てのスキル面で，「学校外の英語学習」の開始時期が早い者ほどスコアが高くなることがわかった。

④ 中学 1 年修了時点では，同上全てのスキル面で，「学校外の英語学習」の頻度が週 2 回までに限り，多い者ほどスコアが高くなることがわかった。

⑤ 中学 1 年修了時点で，性差がリスニングでみられ，女子が男子を統計的優位に上回る。

⑥ また質的研究の中学生に対するインタビューで, 小学校英語活動を「面白かった」,「楽しかった」と答える割合が非常に高かったが, 具体的に内容を質問すると，「よく覚えていない」という回答が多く，履修時間数の少なさやテキストがないため，活動が定着していないように思われた。

５．主な発表論文等
（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）
① 植松　茂男，特区における小学校英語活動の長期的効果の研究-6 年間の継続調査のまとめ，京都産業大学教職研究紀要，査読有，第 9 号，2014，14-37

② 植松　茂男，特区における小学校英語活動の長期的効果の研究，京都産業大学教職研究紀要，査読有，第 8 号，2013，1-16

③ 植松　茂男，佐藤玲子，伊藤摂子，英語活動の効果について－英語習熟度テストとアンケートを利用した予備的調査分析，JES Journal，査読有，Vol. 13，2013，68-83

④ Shigeo UEMATSU，The Effect of English Learning in Elementary School on Students' English Language Development in Junior High Schools，THE JOURNAL OF ASIA TEFL，査読有，Vo.9(4)，2013，113-133

⑤ 植松　茂男，佐藤玲子，伊藤摂子，習熟度・開始学年・時間数の関係－教師に対する予備調査報告，JES Journal，査読有， Vol. 12，2012，138-147

〔学会発表〕（計８件）
① Shigeo UEMATSU，The Role of English Language Instruction at Elementary Schools，International，Conference on Language Learning and Teaching,2013.11.8，Penang，Malaysia

② Shigeo UEMATSU，The Long-Term Effectiveness of English Language Instruction at Elementary Schools,11th Asia TEFL,2013.10.26，Ateno de Manila Univ.

③ 植松　茂男，小学校英語活動の長期的な効果についてー継続調査から学ぶ，第 52 回 JACET 世界大会，2013.8.30,京都大学

④ 植松　茂男，佐藤　玲子，伊藤　摂子，継続調査で見る，小学校英語の成果と課題，第 13 回小学校英語教育学会　2013.7.14，琉球大学

⑤ 植松　茂男，東野　厚子，小中連携－カリキュラム，指導法，学習者と指導者の受け止め方（招待講演），小学校英語教育学会(KEET)，2013.2.10，コンソーシアム京都

⑥ 植松　茂男，東野　厚子，小学校における英語指導は，中学校での英語学習にどのような影響を与えるか？，第 51 回 JACET 世界大会，2012.9.1,愛知県立大学

⑦ 植松　茂男，佐藤　玲子，伊藤　摂子，習熟度・開始学年・時間数の関係，第 12 回小学校英語教育学会　2012.7.15，千葉大学

⑧ Shigeo UEMATSU，Is there any effect of English language teaching at elementary school (ELTES) on the subsequent EFL learning?，10th Hawaii International Conference on Education，2012.1.5，Waikiki，Hawaii

〔その他〕
ホームページ等
http://uematsu-shigeo.net/page.do

６．研究組織
(1)研究代表者
植松　茂男（UEMATSU，Shigeo）
京都産業大学・文化学部・教授
研究者番号：40288965

(2)研究分担者
ヒューバート・ラッセル（HUBERT，Russell）
京都産業大学・文化学部・准教授
研究者番号： 90411016